

北海道工業大学の学生ボランティア「雪かき隊」が高齢者の冬をサポート

若者が気軽に地域貢献できる鍵は、その仕組みにあった

大都市札幌は降雪のシーズンを迎えた。そこで頭を悩ますのが除雪をはじめとする雪対策。とりわけお年よりや体の不自由な方などの雪かきができない世帯のサポートは、とても大切になってくる。市内には地域で知恵を出し合い、冬の生活を快適にする活動を行っている人々がいるが、今回は「大学生がキャンパス周辺の高齢者宅の雪かきをボランティアで請け負う」という事例を紹介する。この取り組みの発案者である北海道工業大学の亀山修一教授に話をうかがうと、ボランティアを行うことによる地域貢献に加え、学生の進路設計に役立つ側面もあるという。若者の協力を上手に取り入れた「雪かき隊」は、その仕組みづくりにひと工夫ありそうだ。



北海道工業大学
工学部社会基盤工学科
教授 亀山 修一

携帯を利用した 学生に負担感のない仕組み

北海道工業大学の学生が、キャンパス周辺の高齢者世帯の除雪をボランティアで請け負う「雪かき隊」がこの冬も活動を始めた。新聞や札幌市の広報誌などでも取り上げられ、話題になっている取り組みだ。発案者の社会基盤工学科・亀山教授の研究分野は道路交通工学。「専門外のことでこんなに注目されるとは思わなくて…」と笑う。

「きっかけは2年前、学生が企画したプロジェクトに大学が金銭的な補助をする『夢プロジェクト』の制度に応募したことです。私どもの学科は高齢者や障がい者に優しい街づくりの実習も行っていることから、高齢者のために何ができるか、と考えてボランティアで除雪をやることに。しかし、ただの雪かきだと工業大学の特色が出せない。そこで着想したのが学生が常に持っている携帯。そのメール機能を使って連絡を取り合うシステムを考えました。このソフト開発は、卒業研究としてプログラムが好きな学生が担当しました。他にも企画や管理で中心になる学生が7、8人いまして、彼らが核になって動く組織をきちんと作ることが重要です。学生はプロジェクトを推進していくよ

うなことは不馴れなので最初は大変でしたが、企画を練って立ち上げていくプロセスにチャレンジさせることは、彼らの将来のためにもいい訓練になります。夢プロジェクトは、プレゼンして、認められた企画だけに資金が援助される。申請すれば何でも通るというものではないんですよ。私の役目はプログラムが完成したところで終わっているの、後は学生たちが全面に出て活動しています」

「雪かき隊」は審査の結果、計画が認められ、平成17年度に20人分の除雪用具と防寒具の購入費約35万円が助成された。隊員は、対象世帯に足を運んで実施日を打ち合わせる巡回員、活動予定が一覧できるホームページの管理者、そして実際に対象世帯で雪かきを行う雪かき隊員などで構成されている。今年度も新しいボランティア隊員を学部を問わず募集し、現在約100名の学生が登録されている。学生の参加を促すにはコツがあると亀山教授はいう。

「ポスターを作って参加者を募るカタチだと、まず来ないですね。君たちの好きな時にできるから、というとポロポロと集まる。学生は学生で予定があって結構忙しいんです。明日、雪かきをお願いしたいと依頼されても多分対応できない。1週間前にボランティアできる日を登録して、対象世帯の希望日と合えば活動

指令がメールで届く、そして活動報告もメールで返信する、という形なので、拘束感や負担感が少ない仕組みだと思えます。それがいいのではないのでしょうか」

除雪を通して地域と繋がる 役に立てる実感が自信に

「雪かき隊」の取り組みに対して、平成18年度に町内会より感謝状が贈られている。17年度は一つの町内会の9世帯の除雪を担当。18年度は対象地域が広がって、三つの町内会で21世帯が対象に。今年度もほぼ昨年度と同じぐらいの世帯を除雪する。意外だが、学生は雪かきをあまりやったことがないらしい。そこで講習会なるものを開催し、雪かきの基礎を学んでもらってから派遣しているようだ。対象世帯や除雪を行っている学生の反応はどのようなものなのだろうか。

「除雪してもらって良かった、という世帯がほとんどですが、要望も多い。例えば、『雪が降ったらすぐ来てほしい』『屋根の雪下ろしをしてほしい』などの声がありますが、それに対応できるオンデマンドの雪かき隊か、といったら、そうではない。学生ができる範囲で活動しているので、そこはやむをえない部分もあります。また、学生は作業の後にその家の方と少し話をしてくるようです。町内会長さんからも『話相手になってもらえれば』という要望があります。除雪を行うことで地域住民との繋がりが持てて、直接『ありがとう』と言われる。工学部の卒業生は、建設関連に就職することが多い。となると、橋や道路建設などに携わる職場では住民から直接感謝されることはめったにないと思われまので、この活動は、自分が人の役に立つことを肌で感じられるいい経験になるのではないのでしょうか」

学生にとって「雪かき隊」の活動は、就職活動にも効果があるようだ。最近では学業とは別に、どんな社会活動をやったかが重要視される時代で、企業側にボランティア活動などを評価する項目もあるという。だが、ボランティアの場を学生自らが創るとなると困難。そこで大学側が制度的に支援することで、地域の人に貢献できて、就職の時にも有利になるような材料を提供したいという側面もあるのだという。

「初年度の責任者だった学生は、希望する会社の就職面接の時、雪かき隊での活動を詳しく聞かれたそうです。本人は『雪かきで就職できました』と冗談まじりに言っていました。道工大は地域から愛される大学を目指していて、地域連携事業が盛んです。『雪かき隊』の他にも、過去には手話講座の企画や視覚障がい



北海道新聞 2005年11月29日掲載

者が触って空間認識を行える触地図の製作をこの夢プロジェクトを上手く利用して取り組んできました。私自身も近くの小学校に出向いてバリアフリーについて教えています。バリアフリーの一番いい見本はJR手稲駅。生徒が駅に調査に行く前に私の授業で理解を深めてもらうのです」

地元の人たちとの連携を重視する同大学は、良好な地域社会づくりに一役かっているようだ。

地域全体の問題として できることから始める

「雪かき隊は今後も夢プロジェクトを利用して継続していく考えです。今年度は情報関連の学生の力を借りてシステムがより使いやすく進化しました。他の大学や地域でも、システムの運営や訪問員など合わせて10人ぐらいの人間がいれば、あとは雪かきの人間を集めれば機能するので、どこでも使える仕組みだと思います。やってみたいという声があれば協力します」

北海道工業大学がある手稲区前田が本格的に開発されて約40年が経過した。今後高齢化が一気に進むと思われるなかで、行政が行っている除雪の限界を考えると、地域住民どうしの助け合いによる自発的な活動がより必要になってくるだろう。学生に無理のない形で参加してもらえる今回の取り組みは、住民自治の好例といえる。まずはそれぞれの地域の実情に合わせ、できることから取り組むことが必要だろう。